

## 大草谷津田生きものの里 自然観察会

### バッタとカマキリ

山口 由富子（市原市）

日 時：2013 年 10 月 6 日（日） 10：30～12：00 天候：晴れ

参加者：30 名（大人 17 名 子ども 13 名）

担当指導員：佐野由輝 ・ 山口 由富子

夜来の雨が上がったばかりで、26℃という蒸し暑い日。参加者の半数ほどが初めてということで、それを意識して所定の説明をし、今回のテーマのバッタについて、環境による生息の違いを観ることにした。管理棟に向かって、右側の住宅地との境界の垣根ぎわを A 地点、駐車場一帯の草地を B 地点とし、それぞれの地点のバッタを参加者に集めてもらい、バケツに収集。その違いを見比べると、A 地点：体が大きい、体が茶色、種類が多い、数が多い。B 地点：体小さい、体が緑、種類が少ない、数が少ない、特定のバッタが多い となり、A 地点の環境は、葉先の尖った背丈の高い草が多く、B 地点の環境は、葉先の形はいろいろで、背丈の低い草が多かった。A・B 共通にいたのがオンブバッタで、そこから草の種類にこだわらないオンブバッタのおおらかな(?)一面がわかってきた。さらに、座興として、最後はこの場所へ帰るとの意識付けもあって、スライスした玉ねぎに爪楊枝を刺し、「虫さん、どうぞ召し上がれ」と思い思いの場所にそれ置いて、めじろんばから谷津田へと向かった。

秋の風物詩(おだげ)はすでに取り外されていたが、この地点でも、参加者に網を振るってもらった。ここでは、イナゴが多く、バッタとの違いを確認。子どもがその違いについて、「イナゴは、食える」と言ったのが、妙に新鮮な驚きとなった。風物詩といえば、こも巻き。江戸時代からマツカレハを退治するために松に巻かれた。ここ大草では、毎年 Y さんが、その年のワラを使ってこもを作り、イヌシデに巻き付けている。こも巻きといえば、害虫駆除とのイメージが強いが、大草では、虫たちを守るためのもの。「この中で越冬するテントウムシやサシガメ類・クモ類のおかげで、稲が守られるんですよ」と、Y さんから預かった正常な米と斑点米とをあげて説明した。

カマキリについては、管理棟前広場のオオカマキリの卵のうと、ウマノスズクサわきの杭のカマキリの卵のう。成体では、オオカマキリ、カマキリ、コカマキリ、ハラビロカマキリが確認された。が、何よりのトピックスは、大草にヒメカマキリがいるという情報を、この地にしばしば訪れる K さんから、写真付きでいただいたこと。何しろ中央博の先生が、その存在を垂唾の様相で受け止めたそうで、この観察会で公表することはためらわれたが、やはり大草の豊かさはお伝えしたい。たくさんの命がたくさんの種を呼び、豊かな自然を育んでいること。葉っぱ一枚にも、生命としての価値があることを、あわせてお話した。

広場に戻って、玉ねぎを見てみたが、お目当てのキリギリス類はおらず、どれにもアリがかなりついてた。もちろん、玉ねぎの糖分に寄ってきたのだろうが、アリと玉ねぎ、その意外性に、首を傾げた子どもたちの表情が、可愛かった。



ヒメカマキリ

2013.08.26 14:58



ヒメカマキリ

2012.11.11 12:16